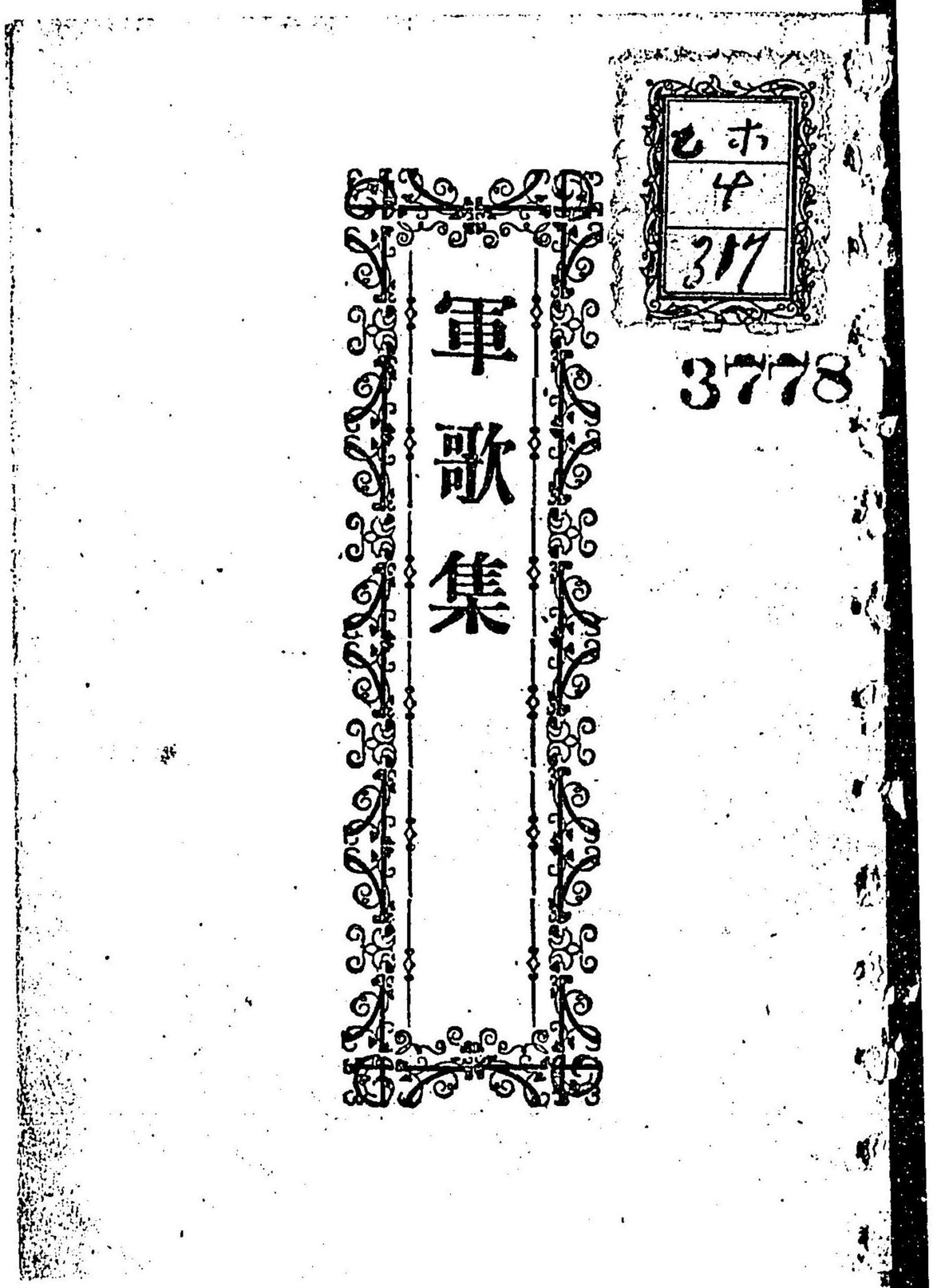

072977-000-8

特62-299

軍歌集

浅野三蔵

M19

CEH-0515

明治十九年七月代　宮内省贈答　85

君が代は千世に八千代に　さゝれ石の
いはとなりて　こけのむすまで

○海もかは
海もかわ　みなくさ
くさもすかはね　おはは
のもとはしる

○皇御國

皇御國の武士い
唯身にもてる誠心と

○國の鎮め

國の鎮めのみやしろと
けふの祭りの賑ひと
治まる御代と守りませ

○命とすてゝ

命と捨て大丈夫か
いかあろ事とか勉むへき
わか大君ゐ盡そまて

二

いつきまつろふ神靈
天かけてもみろあはせ
たてし功績は天地の
いひつきもかむ後の世に
在へき限り語りつき
絶せすつきし万世も

○扶桑歌

わか天皇の治めしる
やは萬世も動かぬろ
治め玉へはとことはゐ
四方に輝く御稜威は
斯るめてたき我國ろ
わか日本は万世も
神の御代より神なから
動かぬ御代ろ變らぬろ
月日の如く照そなり
やよ國民よ朝夕に

天皇が恵に酬いんと
盡せよや人力をも

心と合せひたふるに
合せて盡せ人々よ

○あらきいわね

あらきいわねをふみさくみ
武士の身の常ろかし
いむかふ敵はむけおへつ
み心休めまへらせむ

峻き坂と越えゆくも
習せや慣る君かため
飯もて早く我君の
急けや急け御軍よ

○おほ君の

れ　ほ　君　の
いさを尊と去まつろわぬ
ひとどもはーてたひらけく
みいつかーて去御軍の
ろのいさをとはや

御稜威かーて去みいくさの
國ととむけちはやふる
かへるおもひは大君の
功績貴としろのみいついや

○ふきなる笛

ふきなる笛のろの音も
ものゝ哀としり顔に

俸る旗のろの色も
けふいものころ哀ーけれ

千百萬の敵軍も
おもへる我等か袖までも
とりて來ぬへき男らと
涙の雨にぬれにけり

○軍歌　第一

來れや來やいさ來れ
寄せ來る敵は多くとも
死すとも退くと勿れ
御國を守れや諸共に
恐るゝ勿れ恐るゝな
御國の爲なり君のため

○第二

進めや進めやいさ進め
彈は霰と飛ひ來るも
劔は林と爲すとても
死そとも退くと勿れ
ためらふとなく進め行け
御國の爲なり君のため

○第三

勇めや勇めや皆勇め
御國を守る兵士は
死そとも退くと勿れ
劔も彈もなんのろの
身は鐵よりも猶堅き
御國の爲なり君のため

○第四

勉めよ勉めよ皆共に
汚きとなき國の名を

汚れたものゝと後の世に
言をぬようゝと覺悟して
死すとも退くと勿れ
御國の爲あり君のため

○第五

懷いよ懷いよ能く懷ひ
神より受けたる此國は
我身の失せざる其中は
人手に決して渡さるとと
死すとも退くと勿れ
御國の爲あり君のため

○第六

守れや守れや皆守れ
異國の奴隷と成るとと

恐るゝものは父母の
墳墓の國をい能く守れ
死すとも退くと勿れ
御國の爲あり君のため

○第七

恐るゝ勿れ恐るゝな
民どい愛する我君を
國とは愛する兵ものに
勝つへきものは世に非す
死すとも退くと勿れ
御國の爲あり君のため

○第八

進めや進めや皆進め
腐りし心のあるものは

命と惜まで進み行け
死をとも退くこと勿れ

○第九

進めや進めや皆進め
進めや進めや皆進め
死すとも退くこと勿れ

○拔刀隊の歌第一

吾をは官軍我敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は
古今無双の英雄で
是れあ從ふ兵は
共に慓姦決死の士
鬼神に耻ぬ勇あるも
天の許さぬ反逆と
起せー者は昔より
榮へ去ためし非さるぞ
敵の亡ふる夫れ迄い
進めや進め諸共あ
玉散る劔拔き連れて
死をとる覺悟て進むへし

○第二

皇國の風と武士は
其身と守る魂の

御國の旗とば押立て
御國の爲なり君のため
御國の旗とい押立て
祖先の國とは守りつゝ
御國の爲なり君のため

維新以來廢れたる
亦世に出る身の譽れ
刃の下に死ぬべきろ
死を可き時は今なるろ
敵の亡ふる夫を迄は
玉散る劔抜き連れて
前と望めは劔なり

○第三

右も左も皆劔
日本刀の今更に
敵も味方も諸共に
日本魂ある者は
人に後れて耻かくな
進めや進め諸共に
死を覺悟て進むへし
未來の事と聞き連るに
劔の山に登るのは
此の世に於て面のあたり
我身のなせる罪業と
賊と征伐をるか爲め
敵の亡ふる夫れ迄い
劔の山も何のろい
進めや進め諸共に
死を覺悟て進むへ去
劔の山を登るのも
滅を爲めに非らすして
玉散る劔を抜き連きて

○第四

劔の光閃くは
雲間に見ゆる電か

四方に打出す砲聲は
敵の刃に伏せ者や
絶て果かなく死る身の
其血は流れて川とあそ
敵の亡ふる夫れ迄は
玉散る劍を抜き連れて

○第五

彈丸雨飛の間にも
二つ無き身を惜まずあ

天あ轟く雷か
丸に碎けて魂のとの
屍は積みて山とあそ
死地あ入るのも君の爲め
進めや進め諸共に
死そる覺悟て進む可し

進む我か身は野嵐に
果かなき最后遂くる共
死そて甲斐ある者あれは
我と思はん人達は
敵の亡ふる夫れ迄てい
玉散る劍を抜き連れて

○第六

我し今此に死あん身は
吹かれて消ゆる白露の
忠義の爲めに死そる身の
死そるも更に恨あし
一歩も後へ引くなかれ
進めや進め諸共あ
死する覺悟て進む可き
君の爲めあり國の爲め

捨つへき者は命あり
忠義の爲めに死する身の
永く傳へて殘るらん
義もなき犬と言はるゝな
敵の亡ふる矢迄てい
玉散る劍き拔き連れて

○行軍歌

我か日本の國体は
縱令屍い朽るとも
名は芳はしく后の世に
武士と生れた甲斐もなく
臆怯者ろと謗れな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進む可し
敬き神代の頃よりも

神の御國と名稱へきて
遠き戎夷か國までも
射すや草葉の露程り
類ひ少なき緒環の
守るは誰の職務ろや
五つの訓戒銘肝して
多聚かる人の其中あ
厚き仁惠は駿河なる
五百海坂隔てたる
光輝く旭子の
侮り受けし例めなたに
盡きぬ皇帝の功績を
誠實ある身は甘美にも
東のあひたも忘るあよ
醜の御楯と拔擢れて
不二の高峯も尙ほ低く

伊勢の海そら尚は淺し
寇なる戎夷有もせは
討ち夷けて大君の

○進軍歌

彈丸は霰と空に飛ひ
雷擬ふ砲聲に
我魂の緒と打絶ん
進むに猛き武士は

劔は野邊の電か
吹き來る風も腥く
今はの時ろ勇壯き
蹰躇ふとい何のろの

其皇に若しや又
蹰躇ふとはあきものと
御心慰め奉れ人

屍は野邊に曝そとも
櫻と匂ふ丸段坂
祭り納めにし諸靈は
寇なる戎夷盡るまて
何爲厭はん敷島の
堅固に堅硬き金剛の
人皆あへて羨慕そ
故郷人に品格高く

名は后代ゐ馥郁しく
空に聳もる靖國の
是大丈夫の龜鑑ろへ
假令や火の中水のろて
倭魂飽くまても
石より光輝灼々は
青白なせる桐の章
錦繡と飾る心氣よさ

○軍旗の歌第一

二千五百年以來光り輝く日本國
ろの國守る軍人よ汝の仰ぐ大旗は
我大君の御標ろ君の御言とかしてみて
いかなる敵とも打攘へ忠と勇とに此旗と
地球の上に輝かせいかなる寇をも打攘へ
忠と勇とに此旗と地球の上に輝かせ

○第二

昇る旭ともろともに代々の皇の神々は
汝を援け玉ふへし汝の功と立る場は
此八州國の内あらて外つ國々に在りとれ
神功皇后豐太閤昔しの功績想へ
忠と勇とに此旗と地球の上に輝かせ

○第三

四方海ある日本國砲臺よりも艦よりも
末頼母敷金城は汝等忠義の軍人そ

翼さ猛しき鷲迎も
爪牙鋭き獅子迎も
我皇國に寇と爲る
兇者共の在るならは
雷ちあせる大砲と
電光あさむく劍きもて
いかある敵とも打攘へ
忠と勇とに此旗を
地球の上に輝かせ

○第四

皇國の靈と軍人か
昔は弓矢槍刀
用ゐる利器は何物ぞ
今は銃砲軍艦よ

汝の帶へる銃劍は
揮ふへき時揮ひつゝ
此大御旗と押し立てゝ
大和魂ある人の
鷲とも獅子とも打攘へ
いかある敵をも打攘へ

○第五

我大君の御標と
益す光り輝きて
吾人陸海軍人の
祝ひ唱ひて悅ひて
國の光りを建る旗
寇を平け民と撫て
功績譽めて諸人か
榮譽は限あかるへき

烈しき戰をみる時　國の光りと此旗と
益す光り輝きて　萬世不朽の帝國の
御稜威は世界ゑ響くらん　御稜威は世界に響くらん

○扶桑歌

天皇尊の統御ゑる　我日本は千五百代も
一代の如く神おから　治め給へは大御稜威
猛く雄々しく平らけく　豐かゑ安く在りとかや
其大神稜威朝さ宵いに　あやゑ畏み安國と

仕へ奉ふ人民は　彌や增す增さに眞心の
一つ心ゑ集もへて　我日本を護りける
然き社ろ世ゑ我國と　浦安國と稱へたれ

明治十九年五月廿日飜刻御屆
同　六月　出版

定價金三錢五厘

原版人　宮城縣士族
齋藤善友
仙台區北田町一番地

飜刻人　同縣平民
淺野三藏
宮城縣下仙台區
大町貳丁目十三番地

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]